

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年度計画年の3年目)

1. 研究課題

芸術と社会—近代における創造活動の諸相—

Art and Society: The Various Aspects of Creative Activities in the Modern Age

2. 研究代表者氏名

高階絵里加

Takashina Erika

3. 研究期間

2020年4月-2024年3月(3年目)

4. 研究目的

芸術を歴史・文化・社会との関連からより多角的に考察する研究は近年活発化しており、たとえば美術の分野においては、作家・作品研究を基本として、さまざまな芸術運動、都市文化や生活文化との関わり、美術市場の変化、パトロンの変遷、文化支援、ジャーナリズムと批評の発達、広告と美術、展示空間の多様化、博物館・美術館活動のひろがり、美術受容者の研究等、多様な方法が試みられている。本研究会もその一翼を担うものとして、美術を中心に、歴史、文学、映像、デザイン等の分野の研究者にも加わっていただき、広い意味での近代における芸術作品・芸術家と社会の多様な結びつきの一端を明らかにすることをめざす。基本的には、具体的な作品や資料、あるいは作家や出来事を素材として、社会の中での芸術の諸相を考えたい。場合により研究会の場を美術館や博物館に移し、展示や展覧の場をフィールドとする研究会も行いたいと考えている。

In recent years, there has been a growing amount of research to examine art from a more multifaceted perspective by looking into its connection with history, culture, and the society. For example, while conducting research on artists and artworks is fundamental to the field of art, a variety of other approaches to the subject are also being examined, such as, various art movements, urban and lifestyle culture, the shifts in the art market, changing patrons, cultural support, development of journalism and critiques, advertisement and art, diversification of exhibition spaces, widening activities at museums and art galleries, as well as research on recipients of art. This joint research project will contribute towards this effort by inviting researchers from other fields catering to art, such as that of history, literature, film, and design to participate in workshops which attempt to clarify, in a broad sense, the various segments of connections that artworks and artists have with our society in the modern age. Essentially,

we would like to explore the various aspects of art in the society by examining specific works and materials, or perhaps the artists and events. Depending on the situation, these meetings will be conducted at an art gallery or museum and make the area where displays and exhibits are held as the place of study.

5. 本年度の研究実施状況

1 年間の延長が認められたため 4 年計画の第 3 年目となった本年は、計 8 回の研究会を開催した。内容は以下の通りである。「初期の文部省美術展覧会と社会」「セザンヌと社会」「近代絵画における「引っ掻き」」「近代日本におけるベルギー美術の受容について」「ドキュメント再考」「映画評論家としての戦後知識人、戦後知識人としての映画評論家」「フランス美術の「伝統」について―包括と排除―」「表装界が迎えた近代」。近現代の東京、京都、フランス、ベルギー等における芸術的創造行為と社会状況のさまざまな影響関係や変化の様相について、実証的且つ新知見をもたらす報告が行われた。いずれの研究会においても、発表後に芸術と社会に関わる活発な議論が交わされた。

6. 本年度の研究実施内容

2022-05-14 初期の文部省美術展覧会と社会 発表者 高階絵里加
2022-06-25 セザンヌと社会 発表者 永井隆則 京都工芸繊維大学
2022-07-30 近代絵画における「引っ掻き」 発表者 発表者 大原美術館
2022-09-03 近代日本におけるベルギー美術の受容について 発表者 山田真規子 目黒区美術館
2022-10-22 ドキュメント再考―アンドレ・ブルトンの「ありのまま」の作品を手がかりとして― 発表者 藤野志織
2022-11-12 映画評論家としての戦後知識人、戦後知識人としての映画評論家：新しい日本映画思想史のために 発表者 花田史彦 立命館大学他
2022-12-17 フランス美術の「伝統」―包括と排除― 発表者 大久保恭子 京都橘大学
2023-01-28 表装界が迎えた近代：京都表具業組合誌『美潢界』を読む 発表者 多田羅多起子 広島大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

高階絵里加、岡田暁生、小関隆、高木博志、立木康介、福家崇洋、藤原辰史、森本淳生、藤野志織、呉孟晋、金智慧

学外

小川佐和子(北海道大学大学院文学研究院)、久保豊(富山大学)、多田羅多起子(広島大学 大学院人間社会科学研究科／教育学部 造形芸術系コース)、永井隆則(京都工芸繊維大学)、イリナ・ホルカ(東京大学大学院総合文化研究科国際日本教育研究機構)、三宅拓也(京都工芸繊維大学デザイン・建築学系)、宮下規久朗(神戸大学大学院人文学研究科)、池田さなえ(大手前大学総合文化学部)、花田史彦(立命館大学産業社会学部)、植田憲司(京都経済短期大学)、大久保恭子(京都橘大学 発達教育学部)、國賀由美子(大谷大学文学部)、竹内幸絵(同志社大学)、河本真理(日本女子大学)、久保昭博(関西学院大学)、有賀茜(京都府京都文化博物館)、植田彩芳子(京都府京都文化博物館)、大原由佳子(文化庁文化財第一課)、清水智世(京都府京都文化博物館)、中野慎之(文化庁文化財第一課 文部科学)、林洋子(文化庁)、藤本真名美(和歌山県立近代美術館)、森光彦(京都市美術館)、山口真有香(滋賀県立美術館)、山田真規子(目黒区美術館)、郷司泰仁(香雪美術館)、小嶋ひろみ(公益財団法人 両備文化振興財団 夢二郷土美術館)、実方葉子(泉屋博古館)、柴田就平(笠岡市竹喬美術館)、鈴木千栄子(毎日放送)、孝岡睦子(大原美術館)、高階秀爾(大原美術館)、竹嶋康平(泉屋博古館)、古田理子(高島屋史料館)、松原史(北野天満宮北野文化研究所)、VOLK, Alicia (アリサ・ヴォルク) (University of Maryland (メリーランド大学))、藤井俊之

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
人文研所属 (内女性)		5 (3)	0 (0)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	23 (18)	0 (0)	10 (10)	10 (10)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
国立大学 (内女性)		6 (3)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	21 (7)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)		5 (4)	0 (0)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	20 (13)	0 (0)	8 (1)	8 (1)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)		6 (4)	0 (0)	2 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (7)	0 (0)	3 (2)	2 (2)	0 (0)
民間機関 (内女性)		6 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	27 (22)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	0	28 (18)	0 (0)	7 (5)	5 (4)	0 (0)	100 (67)	0 (0)	22 (14)	20 (13)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数 0 とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名 (必須)	掲載論文数 (必須)	掲載年月日 (必須)	論文名 (必須)	発表者名 (必須)
1	MARANATHA マラナタ	1	R4.6	『最後の晩餐』と『食』の美術	<u>宮下 規久朗</u>
2	京都工芸繊維大学 学 術 報 告 書 (BULLETIN OF KYOTO INSTITUTE OF TECHNOLOGY)	1	R5.3	La théorie de l'art chez Cezanne dans sa correspondance	<u>NAGAI</u> <u>Takanori</u> <u>I</u>
3	小説のフィクショ ナリティー 理論で 読み直す日本の文 学	1	R4.8	モデルとフィクションの問題系 ――島崎藤村「並木」とその周辺	<u>ホルカ・</u> <u>イリナ</u>
4	京都市京セラ美術 館研究紀要	1	R5.3	久保田米僊《雨やどり》について ――明治期における民権論の反 映――	<u>森光彦</u>

5	メディア史研究	1	R4.8	日本メディア論の胎動：今村太平 『映画芸術の形式』をめぐって	<u>花田史彦</u>
6	京都文化博物館研究紀要 朱雀	1	R5.3	小川千甕のフランス滞在	<u>植田彩芳</u> <u>子</u>
7	美術フォーラム 21	1	R4.6	前衛画家と戦争ー吉井忠と小牧源太郎、その深層への旅	<u>清水智世</u>
8	Fashion Talks...	1	R4.10	みる/みせる 都市の近代と〈陳列所〉	<u>三宅拓也</u>
9	アジア遊学	1	R4.5	広東から来た前衛画家：1930 年代の東京における李仲生の画業について	呉孟晋
10	明治維新史学会だより	1	R4.5	別荘を中心とした近代日本の政治家ネットワーク形成ー品川弥二郎・京都尊攘堂人脈の研究ー	<u>池田さなえ</u>
11	Collectionner l'impressionnisme : Le rôle des collectionneurs dans la constitution et la diffusion du mouvement	1	R4.5	La Collection Ôhara-Kojima : Des œuvres d'art occidental pour le Japon du début du XXe siècle	<u>TAKAO</u> <u>KA</u> <u>Chikako</u>

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

次年度も引き続き、芸術と社会について様々な領域から多角的に考えるための研究会の開催を年間 7～8 回程度予定している。内容としては、戦後社会と絵画、地域社会と芸術、20

世紀のパンデミックと美術、現代社会と芸術活動、等に関する発表を行う予定である。年度後半には成果論集に向けての準備に着手する。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班は1年間の延長が認められたため、次年度も引き続き、未発表の班員を中心に、歴史、文学、美術、演劇、メディア等の多岐にわたる研究領域における「芸術と社会」という共通テーマにもとづく発表と活発な議論により視野を広げ、新たな問題意識を発見する場となる研究会の開催をめざす。最終年度となることから、研究班の総括となる成果論集の刊行をめざして準備を始める。